

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2012年6月26日（火）

場 所：名古屋キャンパス R棟1階 会議室

テーマ：東アジアを視野に入れた文化交流史を考える

報告者：徐 興慶（台湾大学日本語学科教授，国際日本文化研究センター外国人研究員）



一、十七～十九世紀に日中間を越境した知識人

(1) 近世の時代背景：

近世中国の明，清交替期，そして同時代の徳川鎖国の日本社会では，戦乱が不可避である環境の中で，人・僧侶・書籍・学問（儒学）のグローバルな越境やそれに伴う文化，思想交流が育まれていた。そこでは，日中知識人の中の儒学観，宗教観，世界観などの異同が生じていた。

(2) 近代化における伝統ある学問と西洋文明の葛藤

近代化を促すインパクトの時代の中で，東アジアの知識人が西洋文明を摂取するという事象が一斉に起こった。こうした日中間の人的思想交流のプロセスにおいて，それぞれの葛藤や相克に伴ってその世界観も変化していく。東アジアにおける多様な方向性の中で，伝統的学問の実用性や新しい学問の再構築を考える必要がある。

二、これまで取り上げた近世日中文化交流の知識人

- (1) 儒者：朱舜水，安東省菴，張斐，貝原益軒，熊沢番山，伊藤仁斎
- (2) 僧侶：隱元，独立，心越（曹洞宗）
- (3) 政治人物：鄭成功

三、朱舜水研究の新史料の発掘とその展望

- (1) 『朱舜水集補遺』（編著，台湾大学出版中心，2004）

本書は、従来の朱舜水全集に全く収録されていない書簡43点，筆語62点，問答23点をはじめ，舜水の手になる跋文や詩，これまでも部分的には抄録されてきた書翰20点，問答8点の全文を，それぞれやり取りした相手（22人）別に，年代を可能な限り比定して年次順に配列し，さらに適当な解説を付した。これによって，朱舜水の知られざる側面や，従来不明瞭であった点が明らかになる。また安東省菴・人見竹洞などの儒者や当時長崎在住の黄檗僧，在留華僑の唐通事，朱舜水の後継者たらんとして渡来した孫の毓仁，張斐などの儒者，長崎町人の代表（町年寄）らの関係書簡を収録し，朱舜水の交友関係や学問的，社会的背景を明らかにする。さらに跋・祭文・賛などからは，その後の日本人の朱舜水観を知ることができ，多角的な朱舜水研究の新素材を提供する。

本書収録の新史料は，1986年に初めて公開された柳川古文書館安東家史料（省菴の末裔が寄贈したもの）をはじめ，日本全国各地で収集したものである。同時に，閲覧・出版を許可して下さった各所蔵機関のご理解を得，また多くの関係する研究者，学兄の温かいご指導，ご助言をいただいた結果でもある。換言すれば，舜水がそうであったように，朱舜水研究をめぐる「生きた日中文化交流」の研究素材を提供している。

- (2) 『朱舜水與東亞文化傳播的世界』（著，台湾大学出版中心，2008）

- ◇東アジアの視野から朱舜水研究を考える
- ◇朱舜水と東アジア儒学の発展
- ◇朱舜水と貝原益軒の「経世致用」観
- ◇隱元と朱舜水のアイデンティティ問題
- ◇朱舜水と安東省菴の思想の異同
- ◇独立と朱舜水：文化伝播者の異なる論述
- ◇心越，徳川光圀と朱舜水の思想変遷

- (3) 「朱舜水與東亞文明的發展」（編著，台湾大学出版中心，2012）

◎ 討論の焦点：

- ◇日本に伝播し，影響を及ぼした朱舜水の学問と思想

- ◇朱舜水と日本の朱子学、陽明学との関係
- ◇明の遺民である朱舜水の日本での史跡考察
- ◇朱舜水研究の現代意義

(4) 『独立全禅師文集』の編纂と出版について

四、東アジア諸国の知識人は近代化そのものをどう見ていたか

(1) 『近代日中思想交流史の研究』（京都：朋友学術叢書，2004）

ここで述べる近代中日思想交流は、主として東アジアの近代の幕開けと呼ばれる1840年に起きたアヘン戦争から、1851年に清朝打倒を宣言し、中国革命の先駆として後世の東アジア社会に多大な影響を与えた太平天国の反乱、さらに清末の先駆的な知識人たちが西洋学問の摂取によって、従来の伝統的、保守的な国策を変え、新しい改革思想を中国に植え替えようとする変法維新期を経て、十九世紀末に孫文の革命思想が萌芽するまでの時期を取り上げている。とりわけ、人物思想交流をめぐる幕末の対外思想構想や明治維新観を研究対象としている。具体的には、「西洋列強の外圧」という時代背景から、清国側の朱舜水、魏源、何如璋、黎世昌、黄遵憲、楊守敬、康有為、梁啓超、孫文らと日本側の徳川光圀、佐久間象山、吉田松陰、横井小楠、高杉晋作ら関連する人物をそれぞれ抽出して比較し、時代の流れに導かれた発想が相手国に摂取され、または受容される実態を明らかにした。

(2) 『東亞知識人對近代性的思考』（編著，台湾大学出版中心，2009）

- ◇十九世紀以前，日本人の朝鮮観
- ◇近代西洋知識の東アジアにおける伝播とその共通テキストの検討
- ◇漢学，蘭学と日本近代化の関連性
- ◇近代日本におけるナショナリズムの成立と展開の様相
- ◇中国近代「新史学」の日本的背景：清末の「史界革命」と日本の「文明史学」
- ◇「国族精神」の境界を引く：梁啓超『論中國學術思想變遷之大勢』を考える
- ◇西学の子：容闕と新島襄の異国経験

東アジアの「近代性（Modernity）」に対する研究方法として、東アジア史とグローバル史がクロスする点を取り上げ、伝統文化と近代西洋文明の葛藤（相互影響）に対して如何に対応すべきかを視野に入れた。すなわち、日本の知識人のみならず、中国、韓国、台湾の「周辺から見る」という観点から、文化摩擦が生じた原因や相違点を究明し、その対応策を生み出していった方法を述べた。いわば、西洋文明が東アジア地域にもたらした社会変容を再認識する必要があるという問題意識を中心にすえたものである。

(3) 『近代日中知識人の自他認識——思想交流史からのアプローチ』

（著，2013 出版予定）

- ◇幕末知識人の西洋文明摂取とその思想変遷
- ◇王韜（1828-97）と日本維新人物の思想比較
- ◇伝統と近代の間——福沢諭吉（1835-1901）の儒教主義批判への試論
- ◇東西文化の融合と構築についての試論——岡倉天心（1863-1913）の「アジアは一つ」を中心として
- ◇小室信介（1852-85）の中国観——『第一遊清記』を中心として
- ◇近代文化論から見た李春生（1838-1924）の日本観——『主津新集』と『東遊六十四日隨筆』を中心に
- ◇他者としての異文化論説——張德彝（1847-1918）の『航海述奇』をめぐって
- ◇近代中国知識人の日本経験——梁啓超（1873-1929）、林猷堂と戴季陶の日本観の比較

五、研究方法—結語に変えて

上述のように、越境した知識人の思想交流において、自国の立場から考えるのと外国の視野によって思考するのは異なる。これまで、日本に散在するオリジナル史料を可能な限り発掘し、これに解説を加え、さらに日中であまり利用されていない資料を駆使して、また関連する問題意識の原点に立ち戻るという方法によって研究を進めてきた。同時に、近年の日中の同分野の学界に良い学問的刺激を受け、なるべく自国中心主義（National Particularism）や一国史の視野にとどまらない客観的な実証研究を進め、少しでもこの分野の研究に貢献したいと考えている。

（文責：徐 興慶，蔡 毅）